



付54話 教育には見える化が重要

教育と医療は似ていると聞いたことがある。建築教育も同様で、どちらも成功すれば称賛され、失敗すると叱責される。時には裁判沙汰になることもある。現在では、診療前、医師が患者に十分な情報を提供し、患者は内容を理解したうえで、診療に同意する。つまり、診療に対し患者の自己決定権を尊重し、リスクのある診療に対し患者も責任を負うことになる。これをインフォームド・コンセント(informed consent)といい、「十分な情報を伝えられた上での合意」を意味する概念である。大学における教育も同様で、その学科の教育内容を全て学生に情報提供し、その情報に基づいて学習方針を決め、選択科目を学習する。まさしくインフォームド・コンセントそのものである。その結果については自己で責任を負う。現在の私立大学では、この方針で教育が行われている。学生が多すぎて手が回らないことも理由の一つだ。ただこれでは、教育者としての責任を放棄しているのではないか、という先生もいる。

学生が明らかに不適切な学習方針を選択する場合がある。限られた量の知識を元に判断した教育方針や選択科目を全て認めることが果たして良いかどうか、パターナリズムを重視する教員は疑問視する。パターナリズム(paternalism)とは、強い立場にある者が、弱い立場にある者の利益のためだと称し、本人の意志を問わずに介入・干渉・支援することをいう。親が子供のためによかれと思っですることから由来する。一方、インフォームド・コンセント自体は、豊富な専門知識と経験を元に、適切な説明とアドバイスをし、それを元に自分の価値観で判断をすることで成り立つもので、学生の自己決定権とそれに伴う責任は、最大限に尊重されるべきであるとする立場である。この相反する立場がカリキュラムに反映する。後者の立場に立つと選択科目が増加し、学生の自由度が増す。逆に前者では必修科目が増加して学生の選択自由度がなくなり、教育側の学習方針に基づく教育が行われる。一長一短、どちらが優れているかは軽々に言えない。

前記と共に次の2つの立場が、教育内容に大きく影響する。一つは、優秀な学生を相手に高度の先進技術や能力向上を目指した教育内容にすべきであるという立場と、劣等生に対しても能力向上を目指し、基礎中心の教育内容として全体の底上げを図る立場である。学生の能力分布はほぼ正規分布を示すが平均値は年々低下し、分散は広がる傾向にある。分散が小さい場合は教育内容にそれほどの違いはない。分散が大きいと、

立場の違いによって教育内容が決定的に異なることになる。前者では、劣等生はついていけず、落ちこぼれる。後者では、優秀な学生は退屈し、勉強しなくなる。どちらが適切か、自身にも良く分からない。

いづれにしても、教育に対する十分な情報を学生に与える必要があり、現在ではテキストだけでなく、WEB 上でその全てを公開する。開講しているカリキュラムと同時に、シラバスによって科目の教育内容と範囲を概略示す。さらに目指す職種に対し、如何なる知識が必要で、どの科目をどの順番に受講すれば良いかも示す。教育環境や教育情報を十分に与えても、無気力・無目的の学生は一向に減少しない。自立的学習、つまり、学びのスイッチが入っていないからだ。

私が還暦の頃だったと思う。専門教育についていけない学生が多くなったという声が他学科からも聞こえてきた。理工学部ではほっておけず、時の学部長が委員会を立ち上げ、教養科目、特に数学と物理学について如何なる方策を採るべきか議論を始める。途中から委員交代で私も参加する。若手の先生たちが、かんかんがくがく、頼もしく拝聴したものだ。1 年次の終わりに、数学と物理学は統一テストを行い、成績の悪い者は、自動的に補修コースを採ることになる。学習には見える化が重要であり、教育用のナビゲーションを開発すべきだという意見で、既にまとまっていた。WG が開設され、当時協議委員の建築 Y 先生が主査となり、発案者の情報学科の S 先生を中心に議論が始まる。私もこの WG に加わり、議論に参加した。最初は情報の教員であり、多くの知識を有しているのではと遠慮していたが、S 先生から有意義なアイディアは出ずじまい。例によって勝手な意見を多く述べ、全体構想をまとめた挙げた。途中から開発業者が入り、WEB 上で動作する学習ナビを作ることになる。名前は、S 先生の見解で理工学ナビゲーションとなった。あまり良いネーミングではないが、それぐらいは花をもたせてあげよう。

開発が終わり、お披露目も終了。ただ、一向に全学部で実施されない。理工学部長になった Y 先生をつついたが、なしのつぶて。やがて、補修講義も取りやめ、統一テストだけ残り、元の木阿弥。あの熱い議論は一体何だったのか。組織のトップになると、昔の事は全て忘れてしまうらしい。後に、Y 先生が学長に、S 先生は副学長となる。私の退職送別会に Y 学長が出席し、隣の席に座る。「お忙しそうですね」「ええ、スケジュールが一杯で」等々、昔話と忙しくしていることを延々と話す。学長になって何をやりたいのか見えてこない。学長が目標だったのかもしれない。ふと寂しく思った。「あの時を思い出せ、いまやれるポストについているのだぞ」、顔を見て、無駄だと思い、やめた。